

論文の内容の要旨

論文題目 **Distinctive Features of Japanese Architecture
and What Is at the Root of Japanese Creativity**
(日本建築の特質そして創造性の根底にあるもの)
Subtitle : **Parts Precede the Whole** (副題 : 部分から全体へ)

氏 名 枝川裕一郎

本論文の目的とするところは、日本建築に特徴的にみられる特質について、以下の点について詳らかにすることである。

- (1) 日本建築の特徴とされる特質について、既存の概念を整理すること。
- (2) 既存概念についての従来からの個別の見方に加えて、新たに包括的・俯瞰的に捉えることで、特質相互間の関係性や背後にある新たな解釈を見出すこと。
- (3) 新たな解釈・切り口を通して、日本建築の特質についてより本質的な理解を深めること。
- (4) 日本建築の特質がどのような建築を生み出すことに繋がるか、検証すること。
- (5) 日本建築の特質の全容を捉え、その全体像を説明できる道筋を見出すこと。

以上に集約されるが、論を進める上で特に留意した考察のポイントは下記の通りである。

- ・日本建築の特質を語ろうとする時、自然との共生や素材に対する思いと云った創造活動の基本的スタンスや、非対称や有機的形態と云った形態的特徴が、取り上げられることが多い。また奥の概念等、日本人独特の感性に言及されることもある。しかしこうした特質の背後には、さらに踏み込んで「日本人らしい考え方／ものの見方」が支配しているように思える。それは何なのか。
- ・「日本人は『ここ』から世界の全体を見るのであって、世界秩序の全体からその一部分＝日本＝『ここ』を見るのではない」、「それは全体を分割して部分に向かうよりも、部分を積み重ねて全体に至る」。これは、文芸評論家：加藤周一の著作「日本文化における時間と空間」における言及であるが、この考え方は、私自身の日本建築の理解／捉え方と軌を一にするものである。即ち日本建築は、「部分から全体へと考えるのであって、全体から部分を考えるのではない」、「全体を分割して部分を生み出すよりも、部分を積み重ねて全体を構成する」、「すなわち部分が全体に先行する」とする特質を持つと考える。
- ・本論文では、建築において「部分が先行する」とは、「どういうことを言うのか」、「どういうことがそれをもたらすのか」、「それがどういう影響を及ぼすのか」、そ

して「それがどういう結果を生み出すのか」、これ等の視点を、論の中心に据える。そして日本人の建築における創造の組み立てと、そのバックグラウンドについて掘り下げ、その感性・発想方法・結果としての形態と特徴について分析・検証することを通して、建築における特質を説明する筋道を構築する。

- ・こうした日本人が発想するデザインの過程に対する考察は、今までも多くの建築家／研究者によって論評されてきたが、夫々バラバラにその思いのたけを論じて来たきらいがある。本論文では、そうした既存の概念を包括的に整理し、独自の視点から俯瞰的に見ることで、様々な特質を並列的に捉え横断的な説明を試みることとする。これが本論文の基本姿勢であり、新たな着目点であると言える。

頭記各目的(1)～(5)に対し、当論文により得られた成果は、下記の如く纏められる。

(1)について

まず、日本人の創造活動の基本スタンスとなる自然とのかかわり合い、生活の有り様、生活信条やこだわり等をベースとした日本人の創造性の特質を抽出した。具体的な事例写真をもとに説明することを通して、その特質がどう云うことを指すのか、事例のどこがそうなのか詳述し、確かにそうだと納得できるものとした。

次に、非対称や有機的形態と云った日本建築の特徴的形態や、奥の概念を始めとする日本人独自の感性に根差す形態等、日本建築の構成上の特質を採り上げ、具体的写真事例を多用し説明した。

以上を通じて12の建築上の特質（日本人の創造性の特質—①自然との共生、②素材へのこだわり、③簡潔性、④木の匠／匠の技、⑤二極性／多様性、⑥並列共存、そして日本建築の構成上の特質—⑦非対称性、⑧建て増し文化、⑨小空間への傾注、⑩有機的形態、⑪奥の概念、⑫全容を見せない）を抽出し、今まで個別に語られることが多かった日本建築の特質について、網羅的な整理を可能とし、さらなるロジックの展開を可能とした。

(2)について

12の特質を纏めて同時に意識することで、個々の特質を独立して掘り下げる姿勢とは異なり、常に包括的に日本建築を把握することが可能となり、俯瞰的見地を優先させることを通して、特質相互間の関係性や背後にあるものの見方の掘り下げに注力した。

日本人の創造性の特質として採り上げたものは、「部分から全体へ」との捉え方の成立に必要な条件と位置付ける一方、日本建築の構成の特質として採り上げたものについては、「部分から全体へ」とする捉え方を前提とすることで説明が容易とな

った。そして、12の特質のそれぞれが、本論文の副題：「部分から全体へ」とする捉え方とどう結び付くか、追及した。

(3)について

建築において「部分から全体へ」とはどういうことを言うのか、何故そうなるのか。

「部分が全体に先行する見方」は日本人が建築あるいは建築空間を構成する際の特徴として、極めて大きな役割を果たすはずである。即ち日本（人）の建築は、「部分部分から創り上げて、全体を構成する」と云うことである。云いかえれば初めに全体像ありきではなく、部分部分を最適に創り込み、結果としてトータルベストの全体を生み出そうということである。

この視点に立って、桂離宮の回遊式庭園や、古くは仁和寺常瑜伽院を始めとする歴史上の建築から、現代の代官山ヒルサイドテラスに至る事例の、構成上の特性を検証した。そして、西欧文化における取り組み方と大きく異なる「部分から全体へ」とする考え方からできあがる建築（都市）は、以下の特徴を持つこととした。

- ・一つ一つの部分における造りこみ・工夫を最重視し
- ・部分（特に隣接）相互間の関係性・つながりが形を規定し
- ・部分の全体に対する意識は希薄である
- ・全体は、部分部分が積みあがった結果として出来上がる

また、部分から出発して結果として全体を成立させるために必要な、拠り所となる構成原理の存在にも着目した。日本人は、部分から全体を構築するという、自らのものづくりの取り組み方について、それを説明して正当化し、実践する論拠を見出そうとしてきたと考えた。構成原理として、生け花の世界で用いられる天地人の原理、井上充夫の行動的空間原理、槇文彦の「グループフォーム」なる構成理念を位置付けた。

(4)について

<部分から全体へ>とする創造の過程を現代において継承し、顕著にその影響が現れている事例を建築単体・建築群・都市計画の各レベルにおいて具体的に検証した。

具体的事例において、奈良県庁舎ではそのデザインの考え方及び造形に日本の伝統のエッセンスが継承され、真壁伝承館では日本人の伝統的物造りの感性に根差す設計手法が実践され、丸の内では多様な部分の集合体として、魅力的な街づくりに繋がっていることを検証した。

さらに自ら設計した二番町ガーデンにおいて、日本建築の特質に基づく手法を、設計のコンセプト造りおよび具体化作業に持ち込み、こうした手法が如何に現代の建築設計に有用であるか、実践した経験を採り上げた。「部分から全体を構成する」

との捉え方が、実際の設計の場面で、極めてうまく機能することを検証した。またこうした特質の論理の並立ならびに展開は、設計の発想、コンセプト構築、デザインの捉え方の整理に大いに有用であり、さらに設計ヴォキャブラリーとして蓄積することは、「設計活動の中で重要なツールとなり得る、そして実際に活用した」と、私が本論文内容を講義した大手ゼネコン設計本部からの反応も得られた。

(5)について

今まで個別に論じられてきた日本建築の特質が、「部分から全体へ」との捉え方を介することで、下記の例のように相互に関連付けることができることを示し、日本建築の特質の全体像を説明する道筋を構築した。

- ・日本人の「自然との共生」を旨とする生活スタイルは、「今＝ここから」との見方を経て「部分が先行する」発想へつながり、それは「非対称」や「有機的形態」の創造へと発展したと説明できる。
- ・「簡潔性」を生み出す精神性は全体を結びつける装飾を排し、「部分」に注目し、「部分」を研ぎ澄ますことから、純粋な「小空間」の創造へと傾注して行ったと考えられる。
- ・「並立共存／何でもあり」の精神性からは、全体の統制を意識せずに「部分が先行」し、結果として「今＝ここ」を重視し、むしろ全体を見せるよりも今ある空間に集中し、「全体を見せない」という特異な形態を生み出すことになったとの説明が成り立つ。

ロジックを展開した日本建築の12の特質が、共通して「部分から全体へ」とするものの見方との関係で説明できることは、日本建築の特質の全容を語る上で、極めて有用な捉え方と言える。日本人に固有な「奥の概念」とその建築における発現、これは日本建築の特質の中でもその由来の説明が難しいが、「今＝ここから全体を見る姿勢」があつて、相対的なゾーン／奥の存在がクローズアップされ、特異な概念につながると説明できる。

本論文において、日本建築の特質の抽出とその全体像の把握を成し遂げようとしたことは、多分に感覚に基づく論理の展開であり、今まで論文として取り上げられることはなかった。ただ、設計者としての活動を通して実感してきたことは、本論文で示した日本建築の特質やその背後にあるものの捉え方についての考察が、如何に日本建築の理解に繋がり、さらには実際の設計に応用可能であり有用であるかと云うことである。今まで感じていたものを少しでもロジカルに展開するため、論文にチャレンジした。「設計の武器創生」へのチャレンジであり、日本の「設計へ活かせる論文」の出発点となることを意図している。